金環食の影飾り

赤江 瀑

角川書店

影節り

赤江 瀑

角川書店

昭和五十年八月三十日　初版発行

発行者　角川源義
発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三
電東京二六五－七一一一（大代表）
郵一〇二　振東京一九五二〇八
印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社宮田製本所
乱丁・落丁本はお取替えいたします
Printed in Japan
0093-872149-0946(0)

金環食の影飾り

赤江瀑

金環食の影飾り

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

目次

序曲　劇場にて――五
第一部　夏――四三
第二部　冬――一六五
終曲　闇日輪――二三三
『大内御所花闇菱』・脱落ノート――二六五

装幀　林　恭三

序曲　劇場にて

開幕を告げるベルが鳴っていた。
曙子はロビーを横切りながら、客席へのドアにのみこまれていく客達のなかに、姉がいた、という気がした。
青地の綸子に白い手描きの寒椿を散らした見おぼえのある訪問着が、後れ毛のからみついた繊いうなじと共に束の間眼の内に残り、
「あ」
と、思わず咽の奥でかすかに曙子は声をたてた。
三宅坂をのぼる車のなかでも、一度、曙子は姉の姿を見たと思った。思ったのが気のせいであることは、よくわかっていた。わかっていながら、やはりあれは姉だったと、曙子はリヤシートに手をかけて、走り去るウインドー硝子の外をいきなり振り返ったのだった。
三宅坂は雨だった。
雨滴にたたかれているリヤウインドーは、皇居の緑を映してか萌葱色のにじみをつくって、

おぼろに外界を遮断していた。姉は内濠ぞいの舗道を歩いていた。かなり激しい雨のなかを歩いている姉だったのに、薄い早春の陽の耀(かがよ)いを背に負って、姉は袂も裾も乾いた光のなかに晒しはためかせていたような気がする。

（お姉ちゃま……）

「え？」

と、運転手が、曙子に訊(き)いた。

「なにかおっしゃいましたか？」

「いいえ」

と、曙子は、見るまに遠ざかった姉の姿から眼を戻して、シートに身を沈めながら、答えた。

「本降りになったみたいですわね」

「そうですな。えろう暗うなりましたな」

運転手の言葉がおわらない内に、稲光りがした。にぶい雷鳴がつづいて起こった。どこかつかみどころのない、遠くで天上界の炸烈する気配をつたえる音であった。

「春雷やな」

と、運転手は、風雅な言葉を使ったけれど、曙子は黙って、雨足を切るウインドークリーナーの動きをぼんやり眼で追っていた。

黒い校倉造りを模した劇場の建物が、やがてそのフロント硝子の前方に姿をあらわした。

開演時刻ぎりぎりに、曙子をのせた車は劇場前へすべりこんだのであった。
入口にもロビーの壁にも、そのポスターは掲げてあった。
黒地に金襴模様をあしらった古色横溢するデザインで、勘亭流の歌舞伎文字が、白抜きで演題をうかびあがらせている。
『大内御所花闇菱（五幕十二場）』
その横に、
——作・綾野姚子
と、肉太の活字で、作者名が並べてある。
車をおりた曙子は、そのポスターの前でちょっと背後を振り向いて、雨の内濠通りを透かし見た。
半蔵門と三宅坂を結ぶ車道は雨煙をあげていて、広大な劇場の前庭に入ってくる車や人影はもう絶えていた。
腕の時計を見た。午後四時。
幕は正確にあがるらしく、開演ベルが鳴りはじめていた。
入口を通りロビーへ踏みこんだ途端に、曙子は再び、姉を見たのである。
後姿だけであったが、姉はベルにうながされて場内へおもむく客達の一団のなかにいた。
（お姉ちゃま……）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

曙子は瞬時たちどまり、その場内ドアをむしろぼんやりと眺めていた。

（やっぱり、きたのね。そう。くると思った。今日は、お姉ちゃまの日なんだもの。どこにいても、きっと駈けつけてくると思ったわ）

曙子は、姉の消えたロビー正面右寄りのドアへ、そしてまっすぐに走り寄った。

三月、月初めの土曜日で初日のせいもあっただろうが、雨に見舞われた悪天候にもかかわらず、客席はほぼ満席に近い入りだった。

無名の劇作家が書いた新作時代戯曲が、通し狂言並みに一本立興行でK劇場に掛かるというのは異例の事態とも言えた。しかもこの戯曲をとりあげたのが、当代歌舞伎界最高位にある女形芳沢蘭右衛門、演出を担当するのが劇作界の大御所箕輪万造という顔ぶれで、豪華な配役陣を擁しての早春公演だった。

話題はまた、この戯曲でいわば新進劇作家として花々しいデビューを遂げることになった作者の綾野姚子（ようこ）が、すでに故人であること。また姚子が、新劇女優であり自らテレビや舞台の脚本も書く綾野曙子の実姉であることなどがマスコミに喧伝され、なかには、曙子が姉の名を使って一芝居打ったこれは自作の発表劇だと臆測するむきなどもあり、興行前の宣伝はかなり賑やかに行きとどいていた。

歌舞伎界の動静は、この名優の鶴の一声で決まるとも言われている芳沢蘭右衛門は、報道関係者のインタビューに応えて、戯曲をとりあげたいきさつを次のように語っていた。

――わたくしも、新作物はいつも探しておりますんですよ。先生方にもお願いして、書いていただくようにしておりますし……でもまあ、いざ興行となりますと、いろいろむつかしいこともございまして、ご存じのように、大きい新作物と申せば、二年に一本、三年に一本という具合になり勝ちで……これは淋しいことですが、なかなか思うようにはまいりません。このたびの新作は、殊に無名の方のご本でしてね……本決まりになるまでは、一苦労いたしましたんですけれど……よくできたご本ですし、登場人物も賑やかで、お芝居の娯しさも十分に盛りこんでございますし、重い理詰めのお芝居でないところがとても魅力でございましてね……

――作者の綾野姚子さんとのご関係は……

――いえ、まったくございませんのですよ。ある日とつぜんと申しますか……じかにお原稿がわたくしの手もとに送られてまいりましてね……

――郵便でですか？

――はい。さいでございます。拝見いたしましたら、いいお作なのでびっくりいたしましてね。箕輪先生にもご覧いただいたんですよ。そのお原稿の送り主が、妹さんの綾野曙子さんでして……

――曙子さんとはご面識がおありだったんですか？

――いいえ。存じあげなかったんですよ。女優さんで、テレビやなんかのご本もお書きだとか

……お会いしてはじめて知りまして……

――率直にうかがいますが、これは曙子さんが書いた戯曲ではないかという情報もあるんですが……この点については、どうお考えですか？

――そうですねえ。大事なことは、いいご本かどうかということなんじゃございませんか？……これはいいご本なんですから。いえ、実はね、こんなこと申し上げるのは不謹慎かもしれませんが……わたくし共の方でもね、曙子さんの作にして出してはどうかというお話も、なくもなかったんですよ。亡くなられたお姉さんて方は、こう言ってはなんですが、無名の方ですし……その点、曙子さんの方が、現役でお仕事なさってるのなら、通りもようございましょ？　乱暴なお話ですけど、そうしてはという声も一部ではあったんです。勿論、ご本人が、そんなこと承知なさいませんよね。――これは姉の遺品を整理していて出てきた原稿だ。実は姉が戯曲を書いていたとは思いもかけないことだったけれど、とにかくこれは姉の筆跡だし、姉の原稿にまちがいない。読んで見ると、よくできている。そして、一番先に頭にうかんだのが、芳沢蘭右衛門だった――と、こうおっしゃるんですよ。だから、わたくしに原稿を読んでもらいたかったとね。お姉さんて方は、お芝居はお好きで、よくご覧になってたそうですよ。けれど、――こんな才能が姉にあるとは、妹の自分が知らなかったんだから、きっと姉を知る他の人達にもそうにちがいない。もし世に出してもらえるなら、ぜひ姉の名前で――と、おっしゃいました。当然でございましょ？　綾野曙子にはとてもこんな才能は

ない。だから、自分の名前を使うことはできない。ご本人が、はっきりそうおっしゃってるんだから、まちがいございませんでしょう？　とにかく、ご覧になって下さい。いい舞台にしてみせますよ。

芳沢蘭右衛門が、春に先駈けて出すこの新作戯曲に意欲を燃やしていることは、共演者達の顔ぶれ一つを見ても明らかだった。大幹部、中堅、新人とふんだんに人材をとり揃えて、まるで襲名興行か顔見世でもなければ見られない陣容だと騒がれるほどだった。

ともあれ、脚本の第一行目を開くと、

『時・天文の頃

所・西の京、周防の国府』

と、書き出されているその『大内御所花闇菱』は、曙子が客席のドアを押して場内へ入ると間もなく、照明が落ち、序幕の幕開けとなったのである。

曙子は、（いつも芝居を観るときには遠見のきくその席を頼むのだが）中央の最後尾通路ぎわの席に腰をおろし、照明が落されるまでのわずかな時間、姉の姿を眼で探した。

青地綸子に白寒椿の訪問着は、もう見つからなかった。

チョンチョンと、拍子木の刻み音が幕の内でして、はたと絶えた。照明が消え、場内は闇と化した。深い静寂がやってきて、幕はいつの間にか上がっていた。

『舞台暗黒』と脚本に指定されていた漆黒の闇が、そこにはあった。

正面奥遙かに遠く、ポッンと一つ豆粒のような明りが見える。『不夜城を誇る大内御殿遠景の明りなり』『そのあたりより能囃子、風にのりて流れ来たり』

曙子は、脚本の指定書きを頭のなかで追いながら、暗黒の舞台に眼を据えた。

『元大内義隆正室・万里小路貞子（三十七、八歳）、乳母・古少将（五十代）を従えて、闇の一角より忽然と現わる。両人ともに、生霊なり』

芳沢蘭右衛門は、主役二役を受け持っていて、この序幕では、生霊、万里小路貞子に扮している。

闇の宙に浮かぶごとく、歩むでもなくさまようでもなく、妖しい気配をひきずってにわかに現われた生霊の出では、観客に息をのませた。

古少将　『オオ、おなつかしや。なつかしや。アレ、ご覧なされませ。永の間住み馴れた、夢にまで見し築山御所が、ホレあの通り、今こそ今こそ眼の下に綺羅を誇って、ほんにまあ、昔ながらに花めく姿、手にとるように見えまする……数寄を凝らせしお屋形の内、障子、畳、床、柱、置物道具、襖絵の金糸銀糸の一つ一つにいたるまで、眼に浮かぶようではござりませぬか……。アレ、耳をお澄ませなされませ……あれは確か、呂雪が笛……』

貞子は、聞き惚れたる態にも見えて、身じろぎもしない。

古少将　『……お方様には殊のほか、あの笛方の者が御贔屓で……』

貞子　『闇日輪の笛じゃなあ』

古少将　『はい、そのようにござりまする。呂雪が自慢の曲、闇日輪……ほんにまあ、いつ聞きましても凜々しい音色……（古少将はふと涙ぐみ）烏羽玉の夜風が運ぶ横笛の囃子音までが昔に変らぬさんざめき……（涙を袂にておさえ）それに引きかえ、がまんのならぬは、おいじらしいお方様が現在のお身の上……本来ならば天が下並ぶ者なき権勢の、あの大内が屋形におわして、誰はばからぬ御正室様。かかる闇夜の遠眼鏡に、外より綺羅を偲ぶ身になり果てさせ給うとは、夢だに思いがけまいものを……』

貞子　『古少将。もう言うまいぞ』

古少将　『さりながら、この口惜しさ、無念さは、未来永劫乳母が身の腸腑のはしばしまでも……』

貞子　『さ、それを言うても、今は夢。ただに空しく詮無い繰り言……』

古少将　『じゃと申して、築山御所に時めいておわしなば、歴とした北のお方が現在のかかる憂き目も元はと言えばみなあの上藹おさいがため……』

貞子　『古少将。まちごうては困ります。わが身の離縁は、この身が願うて望んだこと。誰の支配も受けはせぬ。自らが選んでとった離別の道じゃ』

古少将　『とは申せ、あのおさいめ、いったんはお方様にお仕えした身でありながら、日頃より何くれとのうお目をかけさせ給うたご恩も物かは、お手がついたをさいわいに、事あるごとにお方様をさしおいて、あろうことか人も無げな驕りの数々……それもまあ介殿様御誕生

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.